

授業科目 NO.810 助産実習

Midwifery Practicum

授 業 の 形 態 : 実習

単位数 (時間数) : 9 単位 (405 時間)

開講年次・学期 : 4 年次・前後期

必修・選択の別 : 選択・助産師選択コース必修

キ ー ワ ー ド : 妊産褥婦及び家族、助産診断、助産実践、役割・責任

1 金沢医科大学看護学部の到達目標 (全科目共通です)

- ① 豊かな人間性と倫理観
- ② 看護学の知識と技術、及び実践力
- ③ 地域志向を視野に入れた専門性の獲得
- ④ 生涯学習能力
- ⑤ 国際的視野の獲得

2 学 修 目 標

1) 一般目標 (GIO)

母子保健活動における助産師の役割ならびに社会的責任を理解し、助産の対象となる周産期の母子とその家族の尊厳と権利を擁護し、個々の特性と健康状態に応じた助産を安全かつ安楽に配慮しながら提供する基礎的能力を養う。また、助産実践を通して、助産師として自己の課題を見出す。

2) 行動目標 (SBO) ※カッコ内の数字は上記の金沢医科大学看護学部の到達目標との関連を示す。

- (1) 周産期にある母子とその家族の健康状態を経過に沿って診断し、健康の保持増進、疾病予防と改善に必要な保健指導と助産を実践できる。(①②③④)
- (2) 母子看護活動における医療・社会資源、チーム医療のあり方について理解し、保健医療福祉サービスの継続性(連携)について述べるができる。(①②③④)
- (3) 産科救急の特徴と救急処置ならびに産科手術について理解し、述べるができる。(①②③④)
- (4) 産科病棟の特徴を踏まえた助産業務管理について述べるができる。(③④)
- (5) 助産師に求められる役割・責任・能力・倫理観を考察し、自己の助産観を述べるができる(①②③④⑤)

3 学 修 内 容

周産期の助産過程について、以下の実践を通して学修する。実習内容及び方法の詳細は、実習要項に示す。

- 1) 実習概要 : 分娩期の産婦を受け持ち、10 例の分娩直接介助と産後 2 時間までのケアを実践する。
- 2) 継続事例 : 受け持ち事例のうち、1 事例については、妊娠後期から産後 1 か月までの継続的な実践を行う。
- 3) 実習期間 : 原則 6 月から 9 月のうちの 9 週間、ただし実習期間中に 10 例に満たない場合、延

長実習となる場合もある。

- 4) 実習時間：産婦の分娩開始時間によっては、夜間呼び出しの実習となる場合もある。
- 5) 実習方法：実習施設配置によっては、ホテル等の宿泊を伴う実習となる。

4 評価

評価項目	評価割合
定期試験成績	
実習記録	80%
まとめ（レポート）	10%
授業態度	10%
小テスト	
口頭試問	
その他	
合計	100%

（特記事項）

5 教育担当者

科目責任者：神崎 光子

教 授	神崎 光子（母性看護学・助産学）
准 教 授	山崎 智里（母性看護学・助産学）
講 師	三反崎 宏美（母性看護学・助産学）
助 教	大嶋 舞香（母性看護学・助産学）
助 教	須藤 久実（母性看護学・助産学）
助 手	土合 しおり（母性看護学・助産学）
助 手	丸山 早紀（母性看護学・助産学）

6 教育担当者の実務経験

担当教員は助産師としての実務経験を有している。

7 教科書

母性看護学及び助産学で教科書として指定した書籍

8 推薦参考書

授業で指定した参考書、授業時の配布資料などを活用する。

9 準備学修に必要な時間及び具体的な学修内容

- 1) 助産学概論等、既習の講義の学習内容及び助産技術について復習しておくこと。
- 2) 学内演習で作成した助産過程展開及び保健指導案等を見直しておくこと。
- 3) 周産期の診断及び助産実践に必要な知識について、理解しておくこと。

・公益社団法人 日本産科婦人科学会、公益社団法人 日本産婦人科医会(編)産婦人科診療ガイド

ライン 産科編 産科編 2023 (https://www.jsog.or.jp/activity/pdf/gl_sanka_2024.pdf)

・エビデンスに基づく助産ガイドラインー妊娠期・分娩期・産褥期 2024

(https://www.jyosan.jp/uploads/files/journal/JAMguigeline_2021_citizens_QA/jam_guideline2024.pdf)

4) オリエンテーションまでに必ず実習要項（事前配布）を熟読し準備をして臨むこと。

10 課題（試験やレポート等）に関するフィードバック

- 1) 受け持ち事例の記録は、原則、分娩終了後 2 日後までをめぐに担当教員に提示し、フィードバックを受けること。
- 2) 分娩介助については、自己評価表を基に分娩介助技術の到達度や自己の課題を臨床指導者または教員とともに振り返り、適宜フィードバックを受ける。
- 3) 継続事例の個別指導案については、早めに教員及び指導者に提示し、フィードバックを受けて完成させること。

11 履修上の注意事項

- 1) 助産実践学演習の筆記試験および実技試験の合格が、実習における分娩介助の必要条件となる。
- 2) 詳細な実習内容・方法や留意事項は、助産学実習要項を参照する。
- 3) 実習は学内での既習内容を実践する場であることを念頭に、行動目標達成に必要な助産学・母性看護学及び関連科目の知識・技術の復習をしておくこと。
- 4) 健康管理には十分注意すること。
- 5) 実習中のカンファレンスでは、メンバーで協力して運営し、主体的に発言して学びを深めること。
- 6) 実習中、問題が発生したり、不明な点がある場合には、自己判断せず、必ず担当教員に連絡・相談すること。

12 オフィスアワー等

実習オリエンテーション時に担当教員への連絡方法を伝達する。

必要時、担当教員が指示した連絡方法に従って連絡を行う。

神崎 光子 kanzaki@kanazawa-med.ac.jp

山崎 智里 chisasa@kanazawa-med.ac.jp

三反崎 宏美 mitasaki@kanazawa-med.ac.jp

大嶋 舞香 mall@kanazawa-med.ac.jp

須藤 久実 kumi-s@kanazawa-med.ac.jp

土合 しおり doai-21@kanazawa-med.ac.jp

丸山 早紀 maru-sk@kanazawa-med.ac.jp